



おすすめ書籍

Recommended Books

獣医病理学者が語る 動物のからだと病気

著：中村 進一

228頁
定価 2,200円(税込)
緑書房 2022年11月刊



●推薦者 浅川 満彦 (酪農学園大学 獣医学群獣医学類)

多くの(人の)病院で専属病理医が勤務することは知っていたが、本書で「獣医病理医」という語を初めて知った。さっそく調べてみると、比較的大きな動物病院には、そのような専門職の獣医師が所属しているという。評者は診断に必要な組織診断や細胞診などは、民間会社か母校あるいはその動物病院に近い獣医大に頼っていたものと思込んでいた。長年獣医大に勤務しながら、実に恥ずかしい。

もちろん、本書は私のような時代遅れ人間の知識を更新するために上梓されたのではない。かといって、(著者の思惑は別として)内容的には中高生向きのいわゆる進路指南書とも違うと思う。おそらく、異分野の大学生・専門学校生や一般社会人を対象にされたとするのが妥当であろう。そして、このような読者層を対象に、人も含めた動物の病気を認識する生物科学、すなわち比較病理学の雰囲気伝えることが本書の目的であり、それはほぼ成功している。

本書は「獣医病理医のお仕事」、「動物の病気とからだのしくみ」、「動物の感染症に注意」および「動物にも死因不明社会が到来？」の四つの章で構成される。前の二つの章で(獣医)病理学の基礎と様々な(昆虫含む)動物の形態・系統と病態との関連性を例示していた。こういった展開では、モデルとして取り上げられる疾患が肝心で、肥満細胞腫、犬の可移植性性器腫瘍やデビル顔面腫瘍性疾患、猫のユリ中毒、猫のいわゆる三臓器炎、キリンの突然死症候群、サル類の急性胃拡張など絶妙な選択であった。第3章の狂犬病、コロ

ナウイルス感染症、トキソプラズマ症、(アフリカ)豚熱、アスペルギルス症などいずれも一般の関心を引き付ける感染症は、病理学的に話が広がるので好適な選択であった。これら本文に加え、九つのコラムが検査原理や実際、獣医療の職域などがこれら三つの章の内容を補足しているので、理解の助けとなるはずだ。

以上、満足したのだが、第4章の法獣医学については、もう少し掘り下げて欲しかった。本書著者が警察などから重要事案の依頼を受けていることを報道で知っていたので、不謹慎ではあるが、このあたりの裏話を期待していたのだ。もちろん、事情が事情だけに秘匿すべきなのだろう。「時効」になった頃、本書の改訂版か新作で、是非、詳らかにして頂ければと思う。その際、評者が地人書館の『野生動物の法獣医学』で紹介したような高度に死体現象が進行したモノ、すなわち塩辛かスルメのような検査材料の死因解明手法についてもご教示願いたい。

なお、この章で「獣医学の中に法医学はない」という前提で、解説されておられたが(206頁)、正確には、明治期日本の獣医学にはあったが、その後、なくなったというのが正しい。そのあたりは「徳宮和音・浅川満彦. 2022. 明治期の「法獣医学」について. 北獣会誌, 66: 169-171^{*)}」を参考にしたい。

※補足)上記論文は以下で公開。
<https://www.hokkaido-juishikai.jp/wp/wp-content/uploads/2022/06/02b0963e5ade10feed8398e564718942.pdf>